



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

大阪万博が開催された70年代。日本は高度経済成長の中を突き進んでいました。また、「障害者運動」も盛んとなり、国の施策として障害を持つ人たちが安心して暮らせるように、大規模な入所施設（コロニー）が全国各地に建てられていきました。当然、広大な施設を町の中に作ることは難しく、入所施設の大半は人里離れた場所に建てられています。

ところが、そうした地域から隔離された状態の施設形態は、80年代の「ノーマライゼーション」の考えのもとに、「施設から地域へ」の動きへと変化していきます。そのようにして新たな住まい形態として登場してきたのが、5人から10人程度で共に暮らす「グループホーム」という選択肢です。

昨年起こった「相模原障害者施設殺傷事件」で人は、重い障がいを持つ者たちは生きるに値しない

そらで暮らす、じゃ



「以心伝心」!!

大分万博が開催された70年代。日本は高度経済成長の中を突き進んでいました。また、「障害者運動」も盛んとなり、国の施策として障害を持つ人たちが安心して暮らせるように、大規模な入所施設（コロニー）が全国各地に建てられていきました。当然、広大な施設を町の中に作ることは難しく、入所施設の大半は人里離れた場所に建てられています。

ところが、そうした地域から隔離された状態の施設形態は、80年代の「ノーマライゼーション」の考えのもとに、「施設から地域へ」の動きへと変化していきます。そのようにして新たな住まい形態として登場してきたのが、5人から10人程度で共に暮らす「グループホーム」という選択肢です。

昨年起こった「相模原障害者施設殺傷事件」で人は、重い障がいを持つ者たちは生きるに値しない

として、障害者施設で暮らす19人の尊い命を奪いました。神奈川県は事件を教訓とし、「共生社会」のあり方をスローガンとしながらも、再び同じ場所での施設建て替えを視野に入れて検討し、動き出そうとしています。

再びそこで暮らし続けるということとは、犠牲となられた19人が匿名として一括りされ続けてきたように、社会では「障害者」の一人として埋没してしまい、〇〇さん、という個人がかき消され続けてしまつのではないかと思います。

「事件後」の社会の再建への道のりは、一人一人の住まい方を考え、選択肢を広げていくことこそが大切ではないでしょうか。人が、暮らす、ということとは、一人の人が、個、として社会の繋がりを見出していくことだと思います。

たねスタッフのつぶやき

Aさんの施設入所の話を突然聞いた。Aさんは私の娘の二つ上。学校の時からよく知っていた。私の前の職場でも一緒に作業したり、いろいろとお出かけもした。楽しく過ごした思い出もいっぱいある。縁あって、また小さなたねで再会し、6年近く経つ。先日、お母様と話をしていると、こうおっしゃった。「考えてみたらAも、もういい大人よ。一人暮らししてもおかしくない年頃よね」と。複雑な気持ちだった。1年以上前から少しずつ準備をされて、施設側からのお声掛けもあつての今回のお話。決断されたいから見守ってほしい。

(渋谷)



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp



後記
まだ痛まないけれど虫歯がある。どこの病院に行くか迷いつつ数カ月が経つ。娘から自分が通う所に行けばと勧められるが、親がこれかと思われのが嫌で同じ所に行けない…。私は小1の頃、診察直前の病室を飛び出し、車に鍵をかけて拒否した。痛みが耐えられなくなった小3の頃、連れて行かれた別の医院は薄暗い路地裏。木の扉をガラガラと開けると、畳敷きの待合室に尖鉢と無言の婆ちゃん達。診察室で体を固定され、麻酔無しで神経を抜かれ、ギャー!!と泣き叫んだおぞましい記憶…40年が経つ。今は現代! 早く行こっ(E)

所長 水野 英尚

『当事者研究』って

「当事者研究」という言葉を「存じて」でしょうか。

北海道の浦河町に、精神障がいを持つ人たちの地域活動の拠点となっている「へてるの家」があります。当初より歩みを共にしてきたソーシャルワーカーの向谷地生良氏は、統合失調症などをかかえている当事者たちが、自らの生きづらさをテーマに研究発表することで、幻覚や妄想などの症状に一方的に振り回されるのではなく、症状をコントロールする力を獲得して「こう」というのが、「当事者研究」だと言われます。

向谷地氏は日本の精神医療について「過度な医療への依存がすすみ、特に投薬量で欧米先進国の五倍から十倍の服薬と世界一の精神科病床数をかかえる極端な『医療』に偏った現状ができあがってしまった」と言います。だからこそ「当事者研究」が必要であり、効果的だとするのです。過度な薬依存と専門家依存の現状から、当事者自身が「苦勞の主人公」になることによって、幻覚や妄想の症状に一方的に振り回されるのではなく、症状そのものをコントロール

する力を獲得し、生活上のさまざまな生きづらさを「研究」することによって生きる勇気を取り戻すことができるのが当事者研究の醍醐味である（「向谷地生良著『へてるの人々』より）として、今や世界各地から見学者が訪れています。さらに今では、「当事者研究」は精神障がいだけに留まらず、脳性マヒや発達障がいなど様々な障がいの領域に有効だとして取り組まれつつあります。

熊谷晋一朗氏は、脳性マヒ当事者として車椅子生活を送りながら、小児科医となり、東京大学先端技術の研究センター准教授として、精力的に自身の身体障がいにおけるテーマや、「コミュニケーション障がいと言われる自閉症スペクトラム、またアルコールホリック等の依存症の当事者たちと協働して、さらなる「当事者研究」を深めています。彼のチャレンジは、学生たちとあらゆる「生きづらさ」をテーマにして、新たな「共生社会」のあり方を提示しようという試みです。

これまで、そうした「生きづらさ」を抱える人たちは、障がいを理由に個人の問題として帰結していました。しかし、社会と関係性の課題として捉え直し、「当事者研究」によって当事者自身の言葉が紡ぎ出されるとき、「社会

デル」の課題と捉えることができるのだと思います。

小さなたねにとつての「当事者研究」もまた必要です。特に自らの言葉での表現やコミュニケーションが困難な方達にとつて、「自己決定」をどのように考えていくのかは、大変重要なテーマだからです。学校は特別支援学校か地元の良い学校か、卒業後はどのような場所で活動するのか、医療分野での治療方針はどうすべきか、そして、親なき後、はどのような暮らしをしたいのか等々、そうしたテーマだけでなく、日常で何を食、べたいか、どついついた服が着たいのか、髪型はどうしたいのか、その一つ一つが本人たちの「自己決定」に基づいているのが検証し、研究していくことが、ここでの「当事者研究」になります。

本気で取り組むためには、労力として時間・経費・人材など多くが必要で、何より継続していく忍耐が必要となることでしょう。しかし、これまではその過程を抜きに、保護者（親）の価値観と判断、あるいは支援者の感性



あゝ夢、向こうの空の向こうにある

に頼りながら進められてきたように思います。そして、それが大きく間違っていたわけではないとも思います。そうしてきたことが、障がいを持った生まれ、当事者たちの「安心」や「安全」に生きていくための術であったとも言えます。

しかし、どんなに障がいも重くても、その一人の人生は、やはり本人自身のものです。以前、障害者自立支援法が制定されたとき、多くの障がい者たちが「自分たちのことを、自分たち抜きで決めないで」とスローガンを掲げ、反対運動が起きました。今、声を上げることの「で、その身体で、いや、いのち」で、「私の人生を、私抜きに決めないで」と、言葉にならない声を張り上げている人たちがいるように思います。

その願いや想い、そして暮らしを、当事者を中心に考え、創り上げ、繋ぎ合わせて、沢山の支援を頂きながら地域暮らしを始めることができなにかと、イメージしています。



牛嶋めぐみ

(看護師)

私の夢！ 豪華客船『飛鳥II』で行く世界一周の旅。



今村玲子

(看護師)

あっという間に3年目!! 驚きしかありません。



畠中良子

(ヘルパー)

時々、土曜日に来ています。趣味は週5でジム通い。



津原祐子

(ヘルパー)

いつか和歌山のアドベンチャーワールドで子パンダとじゃれ合いたい私です。



井上明子

(看護師)

目標はベイマックスです。



東 亮二

(介護福祉士)

37歳。青春はジャンプ黄金期



河村紀子

(介護福祉士)

グリーンケープルズでアン・シャーリーに会いたいな♪



八坂幸代

(ヘルパー)

汗っかきの私です。ビールのおいしい季節にがんばります!!

小さなたねの スタッフ紹介



才津知尋 (相談支援専門員・
社会福祉士・介護福祉士)

小さなたね3年目。相談支援をはじめました。



高橋健一 (介護スタッフ)

たねの子どもたちの良きじいじを目指します。



山口由美

(保育士)

たねに来る朝のセブンカフェが楽しみの一つです。



水野英尚

(所長)

もうじき50歳。何か始まりそうな予感!?



深町佳那

(介護スタッフ)

あっち! こっち! ふかまっち!



渋谷瑞恵

(介護福祉士)

老眼鏡無しでは仕事が出来なくなりました。



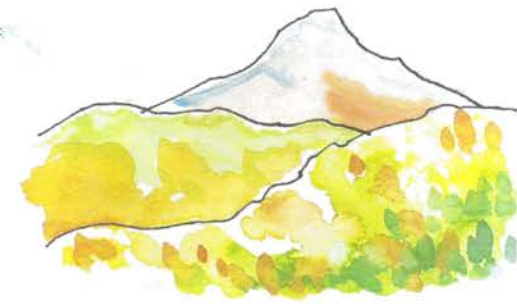
初めまして。1月からお世話になっております看護師の牛嶋めぐみと申します。「小さなたね」ではバリバリの年長組です。どうぞ宜しくお願い致します。

2年前まで縁あって群馬県のハンセン病施設に3年間勤めました。「草津よいとこ一度はおいで♪」と歌われる草津温泉が有名ですが、ご存じでしょうか？ その温泉地から離れた標高1100mの高地にある国立療養所「栗生楽泉園」といいます。

ハンセン病は感染するといった間違った認識で偏見や差別により故郷から追い出され、家族からも離され、一生隔離されるという悲しい歴史があります。感染も遺伝もしないと分かり隔離政策が廃止されたのは平成10年と、まだ最近のことなのです。盲人の方や、手や足の変形、知覚麻痺があるためケガやヤケドをしても自覚症状がなく重症化することも度々あります。それでも自分のことは自分でされ、縫い物や編み物を不自由な手でされているのを見ると悲しさと感動を覚えました。

そこでの私の生活をお話しします。寮はアパート形式と戸建とに分かれ、真ん中には銭湯があり、24時間掛け流しでいつでも温泉に入れました。また離れた場所に入所者居住区域と温泉場、病棟、外来、リハビリ室、宿泊所、各宗派の集会所など全体が一つの村のように構成されています。

山間にあるため冬は-12度という日もあり、外に置いておくとペットボトルは冷凍庫に入れていたようにガチガチに凍り、雪は車がすっぽり隠れるくらい降ります。毎朝の雪かきは大変な重労働で、除雪車が来るのですが家の周りでは自分達で行わなければならない、これが冬の間中続くので、足腰がもうガタガタ



でした。

熊が付近に出没すると、情報が伝えられ注意喚起されます。他に猿やイノシシ、カモシカ、野ウサギ、リスなどに遭遇することもしばしばでした。

夏は窓に光を求めて、蛾や今まで見たことのない昆虫が標本のようにびっしりと並んでいるのを見て、思わず叫んだことを思い出します。けれど2年目を迎える頃には平気になり、珍しい昆虫は写メして福岡の友達や家族に送信していましたが、どうも気持ち悪がられていたようです。虫が家の中に入らないように玄関側の蛍光灯の管はすべて取り外されていたので、虫が入ることはありませんでしたが、夜は暗くて鍵穴が見えないのが困りものでした。

夏の夜の一番の思い出は、車の通らない道路に寝転んで、空いっぱい広がる星を見ながら話し込んだことです。夜空を見上げると北斗七星やオリオン座が分かるようになり、流れ星をしばしば見つけましたが、一人の同僚が「お金、男、健康～」と叫んだ時は大爆笑でした。どんなに叫んでも民家もなく誰も来ないし、暗闇だしで、誰にも気兼ねなく騒ぎました。

草津はクーラーのないお家が多く、暑い日は1カ月ぐらいで、お盆がすぎれば秋が訪れます。周りは山なので紅葉してくると一枚の絵のように美しく、冬支度が始まります。住めば都といいますが、どんな環境も人は慣れ親しんでいき、新たな出会いができたことに感謝して、群馬県草津でのお話を終わらせて頂きます。行動することで考え方や物の見方が大きく変わるチャンスを経験できた私は幸せ者だと思います。

看護師募集



地域生活ケアセンター「小さなたね」では、一緒に働いて下さる看護師を募集しています。
勤務形態・時間・希望曜日などはご相談に応じます。
詳しいことをご知りたい方は、ご連絡下さい。